

ロハスとCSRの関係

——チャンスとリスクの両面から考える

最近、ロハス=L O H A S (Lifestyles of Health and Sustainability)という言葉が新聞や雑誌でも頻繁に取り上げられるようになり、すでに市民権を得た観がある。ロハスとは、文字通りには「健康と環境に配慮したライフスタイル」だが、「健康」には身体健康だけでなく、精神的な健康も含まれている。つまり「ココロとカラダの健康と、サステイナブル(持続可能)な地球環境を重視する価値観とライフスタイル」(*1)である。ロハスといえば、企業にとっての新市場あるいはマーケティング上のチャンスばかりが強調され、新商品の発表で、「ロハスな」といったアピール方法が目につく。それは単なるはやりのかっこいいライフスタイルという意味でしかとらえられていないかもしれないが、ロハスは心身ともに健康な、幸福なライフスタイルであるとされるのである。

ちなみに、ロハスは、日本人が欧米で普及させた、日本古来の伝統食を基本とした生活法・哲学であるマクロビオティック(*2)がそのベースにあり、日本企業はロハスを単なる外来思想と見るべきではない。マクロビオティックの考え方では、食事が精神の安定性にも影響するとしている(*3)。

さて、企業価値を増大させるCSRの取り組みをするにあたって、ロハスへの取り組みとの関係をどう考えればよいただろうか。ロハスを単なる新たな市場であるにとらえる考え方もあるが、それだけではない。下記の点で、ロハスへの取り組みが、同時にCSRへの取り組みとなり、企業価値を増大することに貢献しうる。

1. ロハス関連の商品・サービスを開発・拡販すれば、環境問題改善に貢献する可能性がある

当然のことだが、CSRの重要な構成要素のひとつが環境配慮であることから、ロハス市場の商品を開発・拡販すれば、環境問題の改善に貢献できる可能性がある。

2. ロハス関連の商品・サービスを開発・拡販すれば、ステークホルダーの幸福増進に貢献する可能性がある

CSRの重要な構成要素のひとつがステークホルダーへの配慮であることから、ロハス市場の商品を開発・拡販すれば、ステークホルダーの幸福増進に貢献できる可能性がある。ロハスを事業化すれば、従業員、お客様、株主などのステークホルダーの「幸せ」の実現につながる可能性があるということである。

3. 従業員などステークホルダーのロハス的ライフスタイルを増進すれば、CSRの増進ともなりうる

商品・サービスの開発・拡販以外にも、従業員がロハス的ライフスタイルができるようにバックアップすれば、従業員の幸せと環境問題の緩和に貢献できる可能性がある。それだけではない。ロハスの普及で、本業のCSR度が試される可能性もある。

ロハスが普及することで、本業にマイナスの影響を受ける企業が出てくることも考えられる。つまり、市場を変えるリスク要因ともなりうる。たとえば、食品マーケットでいえば、砂糖、牛乳、油脂、肉の使用が減ってくることが考えられる。ダイエットブームの流れもあるが、ロハスやマクロビオティックは、その普及が現在のところ加速しているようであり、一過性のものに終わるとは考えにくい。 ➤

関連する動きとしては、少食・断食による健康法にも関心が広がっている。マクロビオティックに近い食生活を推奨する本(*4)が80万部のベストセラーになっているといったことも一例である。

こうした食事法が本当に良いかどうかは議論が分かれるだろうが、とにかく本業によって顧客などステークホルダーの持続的な幸せに貢献しているものを提供しているか、つまり本業のCSR度はどうか、という問いかけをしていくことがCSRの取り組みの核とすべきもののひとつであり、中長期的に企業の持続可能な発展を維持するために不可欠であろう。持続的な幸せとは、たとえば、極論すれば顧客をその商品の「中毒者」にして、短期的な快感や利便性と引き換えに中長期的な健康に害を与えていないか、といった考慮だ。たとえば、酒造メーカーが、「酒量はほどほどに」という表示を酒容器にしている場合があるのは、こうした点に配慮したものだだろう。もちろん、短期的な快感や利便性も大切であり筆者もその恩恵を享受しているわけだが、売れさえすれば、それは本業で社会に貢献していることも、CSRの観点からは断定はできないのである。

こうした意味で、短期的にはともかく、将来を見据えてみよう。現在のビジネスが利益を上げていることで社会的責任を果たしているとするのではなく、顧客や従業員やその他のステークホルダーの真の幸せにつながっているか、またつながっていけるのかどうかを、根底から問い直しつづけることは重要である。

(脚注)

*1: <http://lohas-life.jp/lohas.html>

*2: たとえば下記を参照されたい。

<http://www.ci-kyokai.jp/>

<http://www.macrobiotic.gr.jp/profile/top/index.html>

*3: 久司道夫『地球と人類を救うマクロビオティック』文芸社、1998年

*4: 新谷弘実『病気にならない生き方』サンマーク出版、2005年

森 哲郎

(もり てつろう)

CEAR登録主任環境審査員。東洋経済新報社勤務を経て、株式会社KPMG審査登録機構に入社。ISO 14001の審査のほか、環境/社会報告書などCSR関連の業務に従事。主な著書に『ISO社会的責任(SR)規格はこうなる』(日科技連出版社)、『ECS2000このように倫理法令遵守マネジメント・システムを構築する』(日科技連出版社=共著)、『CSR入門講座 第2巻 推進組織体制を構築する』(日本規格協会)など。2006年4月に独立。

